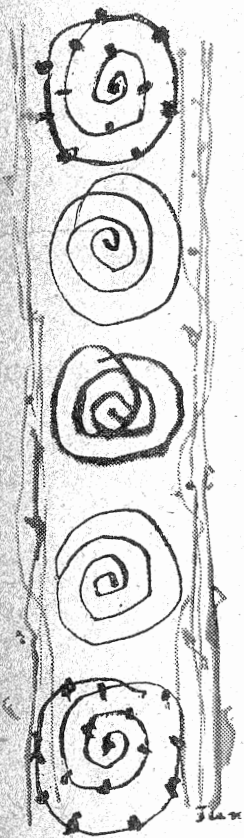


文部時報

第992号

昭和35年4月



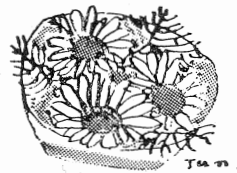
現代教育の課題	海後 宗臣…2
新時代に 即応する中等教育課程のあり方	安達 健二…10
新しい学習指導要領の理解のし方	
中学校国語科の学習指導	渋谷 宗光…14
社会科の内容と考え方	朝倉隆太郎…19
数学学習指導の方向	平田 嘉三
新しい理科の内容と目標	大野清四郎…25
中学校音楽についての問題点	関 利一郎…30
新しい美術の領域	花村 大…35
中学校保健体育科の指導要点	小池 喜雄…39
技術・家庭科の基本視点	荷見秋次郎…43
中学校外国語のねらい	山川岩之助
	鈴木 寿雄…47
	穴戸 良平…52
座談会	
「諸外国の社会教育」……………	56
高橋 真照 河上 邦治 中田 正一	
植山 つる 林 剛	
予算試合	天城 勳…76
伊勢湾台風こぼればなし	菅野 誠…81
国語問題をどうとらえるか	白石 大二…86
〈あれこれ〉	
近代産業と職業教育	A……………24
教育の進展と制度の再検討	T……………38
教育環境をどうするか	K……………42
通信教育の改善……………	9
新刊紹介……………	55
文部省関係出版物リスト……………	51
文部省重要通達一覧……………	96

表紙 渡辺 忠 カット 正木 淳



絵をかく子どもたち

予算試合



天城勲

こんどは少しはお暇でしょうか？ ポストがかわって家内が最初に聞いたことは、前より早く帰れますか？ てすし、息子の質問は、今年の夏休みにはいっしょに山に行ける？ てしたよ。こんな問答をいく度か繰り返した。繰り返しているうちに過去五年間の公私の生活があらためて鮮明に脳裡を走馬燈のようにはせめぐり、しばし妄想に引きずりこまれてしまった。

二大政党の時代に入ってから予算の組み替え問題が起らなくなつたお陰で、いわゆる暫定予算という二重仕事の必要がなくなり、だいたい三月いっばいで予算があがるようになったので、まずまず会計課長の国会仕事は四月にはお役ご免になる。そこで四月、五月は予算執行計画予算の流して内部の打ち合わせや外部の会議とあわただしいうちにも、気分的にはかなり楽な気持ちですぎしてしまう。六月と七月半ばまでが、天下晴れての解放された時期であるが、七月下旬ともなれば、もう翌年度予算編成の準備にとりかからなければならぬ。

予定表が生まれ、予算編成第一期戦闘の準備が始まる。会計課

ポストが変つてから、会う人ごとに、予算を何年やられました？ 五回戦です。そんなに永かつたのですか、最近には例がないでしょう？ 戦前にはもつとやられた先輩もおられたそうですが。でも戦後の予算仕事は以前とは比べものにならないほど激しいですからね。それにしてもよく身体がもりましたね！ そうです、ね！ 自分でも不思議に思います、そのかわりだいがガタがきています。

長室には、臨時に会議卓が三つと椅子の数も二十脚ほど増強され、扇風機が四台、四本柱よろしく配置される。八月一日戦闘開始。これは受身戦である。まず最初の十日間に国立大学七十三、附属病院二十三、付置研究所五十七、国立高等学校八について、それぞれの事務局長、会計課長、或いは施設課長からその概算要求の聴取をうける。黙って聴くだけでも午前、午後いっばいかかるので、うっかり質問応答に熱が入るものなら先方はここをせんとどましくしたてる。聴き手の係は、大学の係、研究所・病院の係、施設の係と三組が交替で聴けるが私だけは交替のしようがない。妙な話だが手洗いに立つた間は説明中止とならざるをえない仕組みである。しかも先方は次々に新手段、議論が専門的な事項に入ると説明するほうもともどもあやしくなるし、聴くほうも素人だからなおさら、あやしげなやりとりでつい時間を費やす。時はなにせい真夏、大して広くもない部屋に二十人以上集つて書類の山の間の議論、四台の扇風機もいたずらに蒸し暑い空気と議論をかき立てかきまぜる。医学系の某研究所に新設部門の要求があつたが、それが気質学というピンとこない難物、専門の先生が書いた説明書をたどりたりと問答しているうちにわかつたようにわからず、こうなると暑さとねむ気の方が優先する。このときひょうきんで人氣のある先方の会計課長が「要するに昔から病は氣からといひますね、つまりこれですな。」と東北弁丸出して名解説をして一同大笑いしたことがあつた。

この十日間がすぎると次は本省六局三十七課官房四課文化財委員会、博物館、ユネスコ委員会、それに所轄機関九の説明聴取が

これまた十日間続く。この方は毎日顔を会わせて仕事をしている省内局長、課長の先輩、同輩、後輩の諸兄であるから、議論もうるさいし、ちょっとやそつとて当方のいい方に承服してくれない。夜半十二時に及ぶことも珍らしくない。この十日間に国立学校関係の予算担当係が聴取事項の整理を進めているので、本省関係の聴取が終わると、ただちに大学学術局と協議しながら国立学校関係の予算の査定とりまとめにかかり、つづいて本省関係分をとりまとめる。約一週間大車輪でこの作業を続行して、月末の省議にやつと間に合せる。それまでに会計課長としての査定の概要を次官に報告して指導をおおき最後に省議は二回ほど行なうのが通例である。最終省議の決定を経て、いわゆる概算要求書に整理して予算決算会の規定に基づいて八月三十一日までといつても三十一日ぎりぎりにとにかく大蔵省に書類を送りこむのである。それが一通りの事務的なプロセスであるが、勿論この前に大臣の政策や与党の方針をじゅうぶんにしゃくしなければならぬし、その機会がこの作業の前段階、或いはその過程に行なわれるので、七月後半から八月末までは時間的、精神的、体力的に目いっぱい活動とならざるをえない。何しろ時期が悪い。ただでさえ身体の弱る蒸し暑い真夏、心がけのよい普通人なら海や山への鍛練、或いは休養のとき、新聞も山のにぎわい海の楽しみを報じているが、予算屋には徹底的な消耗期である。私宅が幸い郊外のたどりつくことこのときほど、空の静澄、風の涼しさ、空気のうまさを感じることはない。それほど大した田舎気分でもない筈なの

が、予算期ほどわが家の付近の自然の新鮮さをひしひしと感ずるのは、哀れな身の上か、はたまたえがたい幸福か。

予算編成五回の間、五人の大臣に仕えたが、予算省議での説明に對する大臣の応対はまことに各様である。重点的に説明するよう努めるのだが、それでも事項は多いし、何百億の話しと百万、十萬オードの話しがちゃんぽんに出るし、また複雑な積み上げや、永い過去やいわくいんねんつきの経費があるので、そういつてはなんだが、新任早々この時期にぶつかった大臣には、正直にいつて、よく呑みこんで頂けないときもある。ある大臣は、ここをせんと説明最中にコックリコックリされてしまう。勢いこんだこつちの氣勢はくじけてしまう。ややあつて眼を覚まされ、すまんすまん、いまは大事なごらしかつたな、もう一度？なんて笑えない正直な方もおられたし、またある大臣の如きは鏡い口調で野党質問を浴びせてくる。はじめはビックリしてこれは皆反對されたのかと思つたが、段々問答するうちに、これは逆説的論法の間大臣みづから問題の本質をあく消化されてゆく、独特の方法であることがわかつてホットしたこともある。また時には、過去の要求額と査定額の比率、事項別の増減傾向等から割り出し推定してどの程度最終的に獲得できるかの説明を求められた参謀将校のような大臣もあれば、前後左右の関連などおかまいなく特定経費の増額を強調される突撃型の方など各人各様のいき方を示された。

東京の九月はまだ暑い。残暑も鍛練と休養の引きつづきがほしい頃だが、この期にいよいよ対大蔵省説明が行なわれる。いわばから各省への数字的な内示が行なわれる。これは会計課長がうけにいく。持ちかえつて省議に報告しかつ伝える。夜になつて始まるから原局に詳細に伝えうるのに完全に一夜かかり、まづしよつ鼻から徹夜となる。内示をうけて各局はこれを検討してただちに復活要求案を作り、会計課長に提出する。第一次内示でかなり要求額が認められていけば復活案も軽くすむが、だいたい第一次内示は不満足なものだ。従つて復活案が膨大になる。これを会計課長は査定するわけであるが原局はなかなか折れない。この内部折衝でへたするとまる一日かかってしまう。ようやく復活案をまとめて大蔵省に提出し、復活説明を行なう。これに對して第二次査定が大蔵省から示され、さらに第二次復活、第三次査定、第三次復活というように繰り返されて予算折衝は進められるのであるが、この進行につれて次に復活の事項と金額は減じて、要求書も初めの厚いものから次第に薄く細つていく。第二次ないし第三次復活までは原局の担当局長および課長も同盟して復活要求説明を行なうが、だいたい三次以降になると会計課長単独の責任において交渉しなければならぬ。この段階になると内示、復活の間隔が短くなる。出つては要求交渉、入つては逆に省内を査定説得するといふ二重人格を繰り返して大蔵省交渉では壁につき当つて進まず、帰つては原局の強い要求にまた押し出され、まるでフット・ボールの球よろしく蹴とばされ通して右往左往するわけである。その間に一つずつでもまたいくばくなりとも主張を通して、いよいよ最後交渉に入る。ここで会計課長として全責任を負つて残つた事項と金額を即決しなければならぬ。全省の期待と声援

二期戦である。通常二週間はかかるが、こんどはところをかえて攻め手に回ることはいふものの、蒸し風呂のような状態での解説と説得と陳情の混ぜ合わせたような概算説明は、夏期消耗戦にどめをさすようなものである。この段階になると何か心気の変化がほしくなり、仕事と全然関係のないことがしたくて仕方がないが、といつて時間後には依然いっばいいっばいで、ただ一段落のみが待たれる。

従つて秋晴れの十月、十一月は少なくとも予算面からは解放され、天高く予算屋肥ゆるときである。この期間大蔵省側がこんどは昼夜兼行で査定作業を進めていて、資料の要求、補足説明の追加があるので、実際は絶えず交渉、連絡が交わされ、みた眼ほど呑み気ではない。しかも何かのはずみでこの期間に臨時国会でもあつたり、大臣更迭でもあらうことならまた事情は一変する。現にこんな実例はたびたびあつてせつかくの計画がおじやんになり、澄み渡つた秋空をただうらんだものである。

十二月末か一月初めが最終決戦である。過去五回の経験では一月決戦が三回、十二月決戦一回、本年度は逆に十二月二十三日から始まり大晦日の暦年の線を突破して一月十三日までという未曾有の長期戦にあつてしまつた。本年を除けばこの最終決戦はだいたい八日から十日間継続するのが通例である。この決戦はまづ閣議から始まる。すなわち、大蔵省の各省要求額を査定して作りあげた歳出総額ならびに査定事項、予算編成方針、財政投融资計画および歳入予算を閣議にかけ、同時に与党にも発表する。どういふものか、この閣議がだいたい夜始まる。閣議がおむると大蔵省

に送られこの場に臨むわけに會計課長としてはまことに責任重大で、本来ならばさつそう、かつ決然と出陣するわけであらうが、すでにときおそし、だいたい数回の交渉往復とその間の不眠不休の徹夜つづきで、グロッキーの態ときている。はためにみたらさぞかし哀れな姿になつてあらうが、当の本人はそうはいかない。緊張と責任感から精神的には一〇〇%の状態にあることが必要である。しかしこの交渉でどうしても折れて引きさがつてくることのできない問題が残る。そこで、これらの事項は次官交渉に残すことにする。次官交渉に残す事項が余りに多ければ重点交渉ができずかつ次官にいたらずに負担をかけて相すまぬと思ふし、さればと弱気を出していいかげんなところて手をうてばこれが最終決定で、泣いても笑つても一年間これで暮らさねばならぬと思へば、これも簡単には折れるわけにいかず、耗弱におちいつた思考力と判断力をしぼつてこの難題に立ち向うのである。やがて各省別に次官交渉に入るが、相手は主計局長ないし担当の部長でこれに文部担当の主計官と主査が従いこちらは次官、会計課長のコンビで当る。一時間ないし二時間のきわめて短時間に攻め守り、守り攻めてこつてどうしても未決のものは大臣交渉によるし、事務的にまとめる見当のついたものはもう一度會計課長と主計官との責任において具体的に整理することになる。かくて最終段階に到達し、大臣交渉の結果をうけあわせて計数整理を行なつて最終閣議決定のはこびとなる。妙なことにこの次官交渉と引きつづく整理交渉を終わるのがだいたい払暁に及ぶのが通例で、冬の日の出がピルの合い間からしんかんとした官庁街を色ぞめ初め

伊勢湾台風こぼればなし



鉄骨体育館の全壊（三重県伊勢高校）

台風と学校施設

菅野誠

伊勢湾台風は学校施設にも近年にない大きな被害を残して去った。あれから約半年、現地では復旧も着々と進んでいることと思う。あわただしかった当時を反省しながら、若干の話題を供することとした。

立会査定説明のコツ

災害によって公立学校施設が被災すると、まず概数の被害報告がなされ、それを集計して復旧対策がたてられる。国の負担金を受けて復旧しようとする個々の学校の被害報告と復旧計画は正式には国庫負担事業計画書とし

て被災後一か月以内に都道府県教育委員会がとりまとめて文部省に提出する。その後災害復旧予算編成の査定の一段階としてこの事業計画書をもとにして大蔵省関係官（通常の場合財務局または財務部の主計課長あるいは予算実施監査官）を立会して現地査定が行なわれる。この現地査定は適正な災害復旧工事費

ている。大蔵省の玄関を出ると熱した頬が朝の冷気にひときわ快よく、思わず深呼吸をして、ああ終わった！いまのままで欲も得もなく、数字の多寡も忘れて、厳冬の街頭にしばたらずむのである。たしか二度目の予算の時か、この最終段階の交渉が激しくまる三日一睡もできなかったことがある。不思議なもの三十分間目くらみに一度ひどくねむい時がきたが、これを越すとあとは頭から身体に冷たい水が流れているような気がして、それほどどねむ気も疲労も感じなかった。もっともはたて口の悪いのに、いわしの丸ぼしのような顔になったといわれたが。

かくして予算は編成され、国会に提出されるしだいであるが、同時に予算屋の一年かくの如しである。私はこれを五回繰り返した。顧みてやはりたいへんな仕事だと思ふ。もちろん私独り、会計課長独りの仕事ではなく、全省それぞれの地位と立場で皆同じ目的に対して同じように苦勞を重ねるわけである。ここでお話ししたことも一通りの筋書きで、この筋を中心に実際はもっと複雑な過程をたどっている。とくに民主政治政党政治の今日、世論や政党、各種の圧力団体の関係を抜きにして予算を作ることはできない。理の当然なことではある。右にのべた筋書きの中途で、大臣交渉がさきに行なわれて重点施策の優先がきめられることもあれば、政府と党の政策予算の調整に手間取って、事務折衝が小休止を喰う場合もある。現に本年度予算編成過程はその適例で、政府と党また大臣の折衝が入り乱れて、事務折衝はしばしば中断し、そのため部隊は待ちくたびれて河原でうたたねをしているうちに、大将が単騎中流に駒を進めて一騎打ちを演じているような

場面もでてきた。ルールがあるようになってなかなか守られず、逆に行ったりルールを守っていると反則でも得点をしたほうが勝ちということになってくる。審判がわからず、時には応援団がグラウンドに出てきて選手よりも激しく試合を始めるという混戦、乱戦になりはじめ何が何んだかわからないうちに、タイム・アップになつてしまふ。という予算編成はほぼどでたらめか腕づくか、少なくとも体力戦のように感ぜられようが、幾回か戦いをやってみると、ないようなルールが実はやはり存在し、力づくのようには見えながら正しい主張はしだいに認められるということは真実である。よく研究された課題で資料的にも整備され、予算の積算も合理的であろう。周囲にも関係者にもじゅぶん説得できかつ説得をつくした予算事項なら必ず認められるものであって、時には政治的にもぎとるような印象を与える予算事項があるからといって——これとて問答無用の力づくで予算がぶつたくれるものではない。絶体でない——この印象にまどわされてこのような努力を怠つてはならないと思ふ。混戦と乱戦の予算試合にも確実に得点をあげるのはこういう類のものであり、またこういうものがたくさん出てくることガルールのないような予算試合にしだいに合理的なルールを確立していくゆえんだと信じている。

（官房長）